原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百八十六号

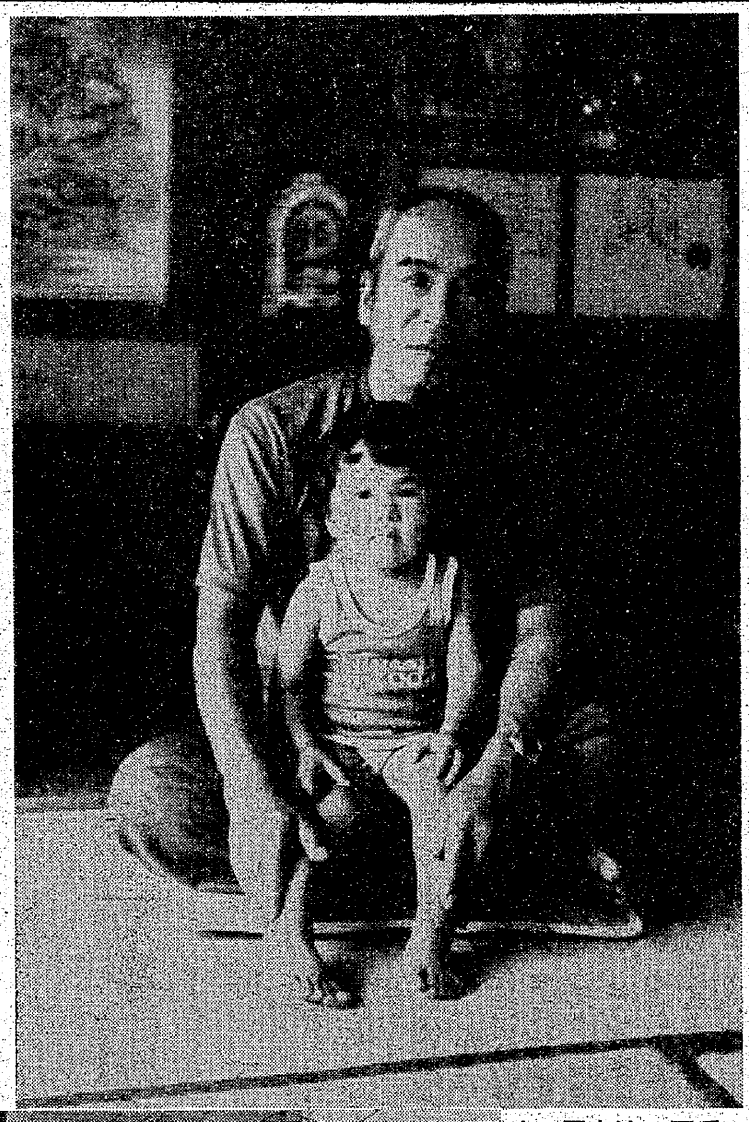
原告団レポート

CO患者——椎葉 一さん

さんざんだった"人生"

退職後まで大きくたたる、資本の差別攻撃

三池闘争では闘いの先頭に



上の写真は、可愛いい孫のあゆみちやんを抱いて楽しく、はいパチリ。

三池闘争のときのたくましい姿。ホッパーの前で。（向つて右側）

語るカルテ

「自覚症状——頭重、頭痛、耳鳴り、視力減退、四肢しびれ、疼痛、発汗、性欲減、つかれ易い、不安、物忘れ、意欲減退。

精神症状——高度の情意鈍麻、軽度の易怒、軽度の過敏、軽度の痴呆、軽度の抑うつ、軽度の計算障害、軽度の思考困難。

神経症状——自律神経症」

ここは、荒尾市万洋区三五班。閑静な新開地。新築された住居で暮らすCO患者＝椎葉 一さんの現在の症状を記録した、カルテである。ほとんど、CO中毒患者ならだれもが共通してもっている症状だ。とはいえ、このことが「性欲減」「高度の情意鈍麻」「軽度の痴呆」などとなってくると、同じCO患者にしても、決して症状が軽い方ではないことを示す。

彼が認定された障害等級は、七級。わずかながらも、年金を受給する身だ。

彼はこうこぼす。

「今は夏だからよかですが、あのプロパンガスをつけた瞬間、また灯油のストーブを消したあとのあのにおい。ちょっとかいだだけでフラーッとぶっ倒れそうになるから、冬となると、息を殺して家のそとに走り出るのがしょっちゅうですよ。

見てください（と右腕をつき出して見せながら）、右の方の腕は思い通りに動くとですが、左の方はダメです。で、思うぞつ動かんからといって、むりに動かそうとすると、気がはやればはやるだけこんどは動かぬばかりか、左腕は硬直してしまいます。

腕が左なら、脚の方も左がおかしかつですたい。寝ている夜半、どうしてそういうこつになるのか左脚全体がわけがわからず、いきなりピーンとつっ張ってきて飛び起きることが、今も変わらず月に二〜三回は起こるとですよ。それが痛かつですたい。そんなときはもう、どげんしようもなく、寝たまま歯を食いしばって、ただじーっとこらえているだけです。こらえていると、痛みがじわーっとどこかへ消えてゆくわけです。え、ほかの症状はどうだ、というのですか。物忘れがひどいことは、自分でもこまるから、知っているけど、ほかのことについては、家内のやつにでも聞いてもらわんと、俺ではわからんですよ」

とある日たずねたときのことだが、そういって彼は笑った。その——彼の妻の千鶴子さんにはついに会えないままだが、ちょうどその日幼い子供をつれてやってきていた、椎葉さんの息子の嫁だという征子さんが、にやにや笑いながらかたわらからいってくれた。

「私としても、身うちにあの三池大爆発のためにCO患者になってしまった人をもっていますから人間が、そのためどんなに変わってしまうものかよく知っています。でも、このお父さんについては、以前のことを知っていませんから何も申しあげられませんけどやっぱり、しょっちゅうお母さんからやられていなさるところを見ますと、よっぽどのことがあるのではないですか」

椎葉さんは頭をかいた。

二人暮らし

彼は、今五十六歳。前後三十八年間勤続したあと、去年の三月定年を迎え、三池炭鉱の三川鉱を退職したばかり。あと、家で何することもなく暮らしている。

妻の千鶴子さんは四十八歳。例の——、三池大爆発で犠牲となった人びとの遺族たちが働く、あのアソシットへ毎日通勤。もともと三川鉱の坑内の採炭切羽で払採炭工として働くうち、大爆発に被災したばかりに労働能力を失ってしまった夫を、働きに出てささえてきたのである。

子どもは一男一女。上が女で文子さんという。二十九歳。他家に嫁いている。

下は男で、一光さんといい、二十六歳。前記したその妻の征子さんも同じトシ。聞けば、同じ高校の同級生同志だそうで、結婚後は椎葉さんの家近く、同じ荒尾の月田に住んでいる。

生まれて二年と八カ月になる、あゆみちゃんという可愛いい女の子がいる。まだ娘といった感じが多分に残る母親につれられては、よくおじいちゃんとおばあちゃんの家にやってくるとか。たずねた日もやってきていて、家じゅう明るい笑顔をふりまいているところだった。おじいちゃんが大好きだということだ。

かくいうしだいで、かねがねは椎葉さんは、妻の千鶴子さんと二人暮らし。働きに出る妻にかわって、いつの間にか家事労働——、とくに、炊事や料理などをたくみにこなすことを身につけたというが……。

機動隊活動

入社は、昭和十七年の九月。十八歳のときで、太平洋戦争がいよいよこれから、という頃のことであった。はじめから採炭工としていきなり小切羽採炭場へ繰りこまれる。

太平洋戦争。そして敗戦。その前後の小切羽採炭の仕事の厳しかったこと。

入社してから九年目——昭和二十六年に結婚。相ついで二人の子供が誕生。

苦しい生活のなか、歩みは三池闘争へ。明治—大正—昭和とつらぬき、積もり積もった労働者の資本への怒りが爆発する。

その頃彼は、荒尾市万田社宅の万町に住んでいたが、三池闘争が起こるやさっそく、その機動隊の一員となり、本部張りつけという重大任務をおびる。ほとんど家に帰ってくることはなかった。四六時ちゅうあのヤッケに身を固めながら三川講堂で起居。いざ緊急動員令が降ると、そのうえヘルメットを目深にかぶり、登山靴にはきかえ、隊列をがっちり組み、飛び出さなければならなかった。

ホッパーのストライキを防衛するピケットラインを、からだを張って守るために、労働者に対して荒々しい敵意をむき出しに迫ってくる数千の完全武装の警官隊と相対峙し、また資本の手先になりさがっては、闘う労働者仲間に襲いかかってくる第二組合の暴力とわたり合いもした。

「もう今日で、ひょっとすれば一生の終りかも……」、と人知れず覚悟を固めたときさえあるのだ。現に、いつだったか、そんな闘いが終ったあと、気持が落ちついたところでわが身をふり返って見ると、これはどうだ、ヤッケの左胸のあたりから右の下腹部のあたりにかけて、明らかに鋭利な刃物で一直線に、スターッと切り裂かれているのに気がつき、思わずゾッとした思い出もある。

ひどい差別

三池闘争が終ると、資本のはげしい見せしめの差別支配が、これでもか、これでもかと、闘う三池労組員のうえに加えられてくる。

彼はレッキとした採炭工だ。その採炭工が、ほとんど本来の採炭の仕事は与えられず、恥ずべき雑作業ばかりに、暗い坑内をはいずりまわらなければならなかった。

おもに押しつけられた作業は風道づくりなど。「増産、増産」の資本の命令によって切羽が急カーブを描きながら進行していく。すると、それに対して空気（酸素）を通わせるための風道を開削しなければならないのだ。

風道は、いわば地底に掘る小さなトンネルで、いずれもせいぜい高さが八十センチメートルに、横幅もせいぜい一メートルありやなしや。

そんなところをほうようにして、ショベル一つで岩石を削り落とし、削り落とした分をかき出しながら、トンネルを切り開いていくのである。

同じ風道づくりでも、切羽のヘッドの方ならまだいい。だが、彼が繰りこまれるのは、きまって切羽の終端部ばかりだった。地圧とともに荷がかかり、うえからは天盤が押しさげられ、下からは盤ぶくれが避けられぬ。

しかも、仕事にたちむかう者に襲いかかってくる風はといえば、それこそ台風だった。それも地熱を運んでくるのでたまらぬ。顔はカーッとほてり、目は開けてなどおれなかった。

そして、支払われる賃金はといえば、この方は確実に、超重労働の毎日の仕事とはおよそ逆に、いつも最低の最低。

燃える怒り

「道理も、屁ったくれもなく押しつけてくる差別。いかなる資本でも、これほど劣悪なやり方はなかですよ。会社・職制は、ひと口目にはいいます——『会社があってこそ、労働者もある。だから働け』と。そんな理屈がどこの世間にありますか。働く労働者があってこそはじめて、会社もなりたつのではないですか。働く者がいなくて、会社のなりたつ道理はないですよ。働く労働者をこそ大切にすべきですよ。その、一番大事なことを忘れた三井に、ロクなことのあろうはずがなかです」

昭和三十八年十一月九日三川鉱で起きた大爆発こそ、その何よりのあかしともなった、ということもできようか。だが、働く労働者の方から、死者四百五十八人に、CO中毒患者八百三十九人という未曽有の犠牲者を出すことなしにはすまなかったが。

この大災害で、彼自身も大きく命を傷つけられてしまったが、同時に同じ三池労組の旗のもとに闘ってきた、同じ採炭工だった実の弟の命をも奪われている。同姓で寅二さんといい、三人の子どもを残して死んだ。

「折角この世に人間として生まれてきたのに、たった一つしかない人生を、三井のためにさんざんにやられました。差別で苦しめられ、しかもそれが原因となって、退職金も、厚生年金も大損。三井の労働者への攻撃は、この通りあとあとまでもたたっています。許されんですよ」

常々のどかそうにもとれる椎葉さんの表情の奥に、かい間見た燃え続ける資本への怒りだった。